

輪廻

2005(平成17)年11月14日鑑賞(東宝試写室)



監督・脚本＝清水崇／出演＝椎名桔平／優香／香里奈／小栗旬／松本まりか／小市慢太郎／杉本哲太／治田敦（東宝配給／2005年日本映画／96分）

…… Jホラー『呪怨』（02年）、『呪怨2』（03年）を大ヒットさせた清水崇監督が現実にあったホテルでの大量殺人事件を題材として、3匹目のどじょうを狙ったのがこの映画だが、さてその出来は……？ 奥菜恵、酒井法子に続く3代目ヒロイン（？）を優香が熟演しているが、セリフが少ない分その演技は大変……。まあ、スクリーン上でのたうちまわる優香の姿を観ながら、観客がそれぞれ、自分の前世の姿を考えてみるのもオツなものかも……？



3匹目のどじょうは？

この映画は、Jホラーと呼ばれる『呪怨』（02年）、『呪怨2』（03年）を大ヒットさせた清水崇監督が、3匹目のどじょうを狙ったもの。タイトルの『輪廻』は、日本人なら誰でもボンヤリと知っている知識だが、その体系的な思想よりも、前世の姿や親との因果という考え方の方がより現実的な話……。そして誰でも1度は、自分の前世の姿がどんなものだったのかについて、考えたことがあるはず……。？

そんな学問的なテーマ（？）を、1970年に群馬県粕川郡の尾野観光ホテルで現実起こった、11名の大量殺人事件を題材に描こうとしたのがこの映画だが、さてその成否は……？



自分の前世を考える

映画の冒頭、3人の女子大生が楽しげに、「私の祖先は平家の落ち武者」などと話しているシーンが登場するが、実は、それってかなり怖い前世……。？ しか

しそれ以上に怖いのは、女優の卵である森田由香（松本まりか）が、「私の前世は、35年前のホテルで起こった11人の惨殺事件で首を絞められて殺されたもの。今でも首にその痕が残っているの」というお話……。まんざらその話がウソではないという証拠に、由香の首にはくっきりとその痕が……？

よくわかる映画製作の現場

映画製作の現場を映画の中で描いた名作は何ととっても、深作欣二監督の『蒲田行進曲』（82年）だが、この『輪廻』も松村郁夫監督（椎名桔平）が、映画『記憶』の製作に執念を燃やしているというのが物語の基本。この『記憶』こそ、1970年に群馬県粕川郡の尾野観光ホテルで現実起こった、大森範久教授（治田敦）による11名の大量殺人事件を真正面から描こうとする話題作だ。そして松村監督によってなぜか抜擢されたのが、最後に殺された大森教授の娘千里という重要な役を演ずる杉浦渚（優香）。ホントは今回のオーディションでも、自分をうまくアピールできず、マネージャーの村川忠司（杉本哲太）を心配させていたのに、なぜ彼女がこんな大役に抜擢されたのか、それは物語の進行の中で少しずつ明らかに……。そしてまた、松村監督がこの映画製作にこれだけの執念を燃やす理由も少しずつ明らかに……。

尾野観光ホテル内での松村監督による俳優たちへの指示は厳しく、映画製作の現場はピリピリした緊張感に包まれている。監督以下スタッフと俳優陣が心を1つに合わせなければ、到底いい映画はつくれないということが、この映画を観ているとよくわかるが……。

演技の本質は体験すること！

スタッフと俳優陣の一行は、バスで今は荒れ果てた尾野観光ホテルに到着。その目的は、大森教授の手にかかって次々と殺されていった11名が、どの位置でどのようにして殺されたのかを、それぞれの俳優に体験させること。さて俳優たちは、35年前の惨劇を今この現場で、それぞれどのように体験することができるのだろうか……？

ここで異様な反応を示したのが渚。松村監督の指示にしたがって次々と倒れ込

んでいく俳優たちの姿を見ていると、渚の目にはくっきりと35年前のあの姿が……？ そして、何かに導かれるように廊下を歩き、入っていったのが227号室。さらに何者かに追われているため逃げ込んだのは、押入れの中。その中で怯えながらじっと身をすくめている渚の目の前で押入れが開かれたが、そこに立っているのは、血で真っ赤に染まったナイフを手に持った大森教授、それとも松村監督……？

総工費1億円のホテルを再現したが……

こんな、現実とも35年前とも判然としない尾野観光ホテルがこの映画の主たる舞台。同じホテル、同じ廊下、同じ227号室ながら、スクリーン上には1970年当時の美しい姿と35年後の荒れ果てた姿の両方が交差しながら登場する。パンフレットによれば、このホテルの総工費は1億円とのこと。

来る12月17日に公開される話題作『男たちの大和／YAMATO』の撮影のためにつくられた、「戦艦大和」の艦首から艦橋部分まで190m、約3分の2のセットの製作費が6億円という話題が日本国中を駆けめぐったが、これは観光客が多数訪れる効果を生んだから、かなり意味のある投資だった。しかし、東宝のスタジオ内に立派なホテルのセットをつくっても、それはどうせ潰すだけ。また現実に建てられているキレイなホテルをわざわざ廃墟仕様に仕上げるために、全面的な装飾（汚し）を施すというのも巨大なムダ……。果たして、その巨大なムダに見合うだけの観客動員ができるだろうか……？

1番怖いのは不気味な人形……？

大森千里が父親の手で殺されたのは6歳の時だったから、そんな彼女がいつも人形を抱いていたのは当然……。そして、松村監督が千里役を演ずる渚に見せたのが、この事件の唯一人の生き残りである大森教授の妻の歩美（望月美緑、三條美紀）から預かった35年前の姿そのままの人形。もっとも、この人形は左目が半分切り取られ、何とも無惨な姿に……。

この映画は、特別ホラー的なものが登場するわけではなく、映画の撮影風景の中に前世の姿をダブらせることによって観客の恐怖心を煽ろうとしている（？）

ものだが、そんな手法の中で1番不気味なのがこの人形……？ 優香の恐怖に歪んだ表情とともに、再三登場するこの不気味な人形にも注目しよう。

もう1人の主人公弥生は？

この映画のストーリーは単純そうだがわりと難しい。それは、渚を中心とする映画製作のストーリーとは別に、もう1人の主人公ともいべき、「子供の頃からいつも赤い屋根のホテルが夢に現れる」と語る大学生の木下弥生（香里奈）が登場し、違うアプローチで前世の解明（？）に乗り出すため……。そんな弥生に、「自分の前世とは……」と語る森田由香を紹介したのは、弥生の恋人の尾西和也（小栗旬）。

「なぜそんな女の友人がいるの？」と聞く弥生と和也の間には、当初ちょっとした痴話喧嘩模様も生まれかけたが、由香の言葉を聞き次第に自分の前世についての追究を進展させていく弥生。そんな弥生の行く手には、どんな物語が待っているのだろうか……？

セリフの少ない熱演は大変……

テレビを中心に活躍している優香は、酒井法子らとともに私の好きな女優の1人だが、映画での登場は少なく、これが2本目の主演映画。熱演していることはわかるものの、ホテル内で展開される演技は、その役柄上セリフがほとんどなく、ハアハアという息づかいや恐怖の表情で表現するものが多いため、その演技は大変。とりわけ、映画『記憶』の撮影のためのリハーサルを何回かくり返した後、松村監督の「本番スタート！」の号令とともに始まった撮影は……？

現実の映画撮影と35年前の大森千里の行動がダブっていくその手法は面白いものだが、やはりなかなかわかりづらい……。そして、そのシーンが延々と続く中、映画はラストに向かって……。さて、この映画のエンディングは……？

2005(平成17)年11月15日記